

あしよろ・ハードサポート通信

4月に入って雪解けも進み、堆肥散布や圃場作業が始まりつつあります。暖かくなり、牛たちの毛づやなど牛群の印象がグッと良くなりました。春から夏にかけて分娩が多くなる酪農場も多いと思います。今月は乾乳期管理についての話題です。

◆ 乾乳期の飼養管理



強い子牛の出産、分娩後のスムーズな立ち上がり、順調な乳生産。これらを実現するためのポイントは乾乳期の飼養管理で、この乾乳期間に母牛が栄養バランスの整ったエサを食べ、適度な運動をして太り過ぎることなく、そしてどれだけストレスなく過ごせるかに大きく左右されます。

乾乳期間は45～60日間で、前・後期に分けて管理するのが一般的です。乾乳前期では、毎日の搾乳で傷んだ乳房組織や乳腺細胞の休息・修復が行われ、分娩前3週間（21日間）に当たる乾乳後期では、ホルモンの働きによって乳腺細胞が再発達し、出生に向けて胎児がぐんぐん成長していきます。

◆ 乾乳期の乾物摂取量（DMI）を落とさないために

- ・ 飼槽と休息場所を過密にしない（定員は、連スタ数・ベッド数の90%にする）
- ・ 飼養場所の移動を少なくする（群の顔触れが変わるたびに闘争が起こる）
- ・ 分娩2～7日前に移動しない（特に、分娩房に移すタイミングに注意）
- ・ 嗜好性の良いイネ科の粗飼料を食べさせる（発酵品質が悪いものや刈遅れはNG）
- ・ デントコーンを多給しない（1日1頭当たり5～10kg以内）
- ・ 肢蹄が痛くない（痛い牛は、乾乳にするとときに治療を済ませる）



フリーストールの乾乳舎。全頭並んでも余裕がある飼槽スペースでは競合が起こりづらい。



群移動すると序列決めが始まり、採食や休息の時間が削られる。肢蹄にも強い負荷がかかる。

◆ 乾乳期の栄養 ---代謝タンパク質 (MP: Metabolic Protein)

分娩が近づくころの胎児は、1日1kg前後ずつ増体していきます。母牛は自分の栄養状態に関わらず、胎児の成長に必要な栄養を母体から削って提供するため、この時期に栄養が足りないと母体の体タンパク質が消費され、分娩後の疾病や乳量不振のリスクが高まります。様々な研究が進み、近年では、胎児の発育と乳腺細胞の再発達に必要な代謝タンパク質は乾物で1日1,200g-1,300g以上と言われるようになりました。この母牛への代謝タンパク質給与は、子牛の胸腺を強くする点からも注目されています。

乾乳後期のメニュー	①	②
グラス1番 配合 (18-76)	飽食 4 kg	飽食 3 kg
バイパス大豆粕	0 kg	1 kg
乾物摂取量	13 kg	13 kg
代謝エネルギー充足率	102 %	100 %
代謝タンパク質充足率	91 %	102 %
代謝タンパク質量	1,108 g	1,245 g

濃厚飼料給与量は、乾乳前期で2kg、乾乳後期で4kg程度まで増給します。

表は乾乳後期メニューのイメージで、厳寒期でなければ、代謝エネルギーは一般的な18-76の乳配だけでも充足可能ですが、高い代謝タンパク質要求量は、ノーマルな乳配だけではどうしても上手くカバーできません(①)。

代謝タンパク質を充足させるには、加熱大豆粕やグルテンミールなどのバイパスタンパク飼料を0.8~1.0kg程度、乳配と置き換えて給与するとうまくいきます(②)。

(加熱大豆粕：アミックスS、ソイパス、ソイプラス、コプロ、アミプロ、など)

いずれも香ばしいにおいで、粉碎状ですが嗜好性が高く、分離給与でも割と問題なく食べてくれる飼料です。

・・・来月も乾乳期の話題を続けます。(久富聡子)

・足寄で先駆けて取り組んできた乳汁PAGの妊娠検査について、4月から十勝農協連さんでの検査体制が整い、より安価で迅速に結果が届くようになりました。

授精28日後以降の乳汁での検査でマイナスの牛を摘発し、再授精につなげられるのは、酪農家さんにとって大きなメリットです。

★分析料金(平成30年度)：1検体550円(税別)

★平日午前8:30までに生乳センターで受付した乳汁サンプルは、当日発送

★これまで通り、ローリー運転手さんによるサンプル回収もOK

★お問い合わせは、生乳センター(永守課長)、または営農部(佐藤さん)まで

・それぞれの経営での適切な後継牛頭数確保を目指し、営農部担当者さん、ハードサポート久富/市川で、哺育育成牛の飼養管理状況をテーマに全戸巡回していく予定です。普段の営農の中でのご質問やご相談など、この機会にどんどんぶつけていただけたらと思いますので、よろしく願いいたします。